

# 栄光

説教

## 『試練を逃れる道』

コリントの信徒への手紙一 10章13節〜22節

麻布南部坂教会牧師 松谷祐二

説教・「試練を逃れる道」 松谷祐二牧師…1
特集・2024年に チャレンジしたいこと ……………2
追悼・ 志磨恵美子姉 島田敬子姉……5
説教・「キリストの 祝福を携えて」 岸俊彦牧師……6
書評『服従』…7
長老のファイル…7
牧師の書齋から…8

コリントの信徒への手紙一10章13節は、クリスチャンやその他多くの人々の心を励ましてきた聖句です。今日はその続きも踏まえて、御言葉に聞きましょう。

パウロはコリントの教会に宛てて、特に「賢い」「強い」と自負する人々に対して書きます。コリントにはギリシャの神々の神殿が沢山あり、町の人々は一種の公共の場として出入りしました。始終、礼拝儀式があり、偶像にささげられた肉で会食し、交流をしました。コリントの教会には、クリスチャンとなってもその習慣を続ける人々がいたのです。偶像を避けるようにという聖書の指示を知りつつも、「賢い」「強い」と自負する人々は、偶像の宮に出入りし、

肉を食べたからと言って自分の信仰は影響を受けない、と言います。しかしパウロは懸念し、警告しました。あなたがたのその姿は、後からイエス・キリストを信じる人々に誤解を与え、「多くの神々の崇拜にもう一人、イエス・キリストを加える」という具合にさせてしまわないか。そもそも、あなたがたは「自分は影響を受けない」と言うが、偶像の宮に出入りしているうちに、あなたがたのキリストに対する心が変わってしまわないだろうか。「立っていると思う者は、倒れないように気をつけなさい」(12節)。

そしてこう続けます。「あなたがたを襲った試練で、世の常でないものはありません。神は真実な

方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えてくださいます。私の愛する人たちが、こういうわけですから、偶像礼拝を避けなさい」(13〜14節)。

パウロは、コリントの信徒たちが当然のように続けてきた、神々の神殿に出入りし、そこで宗教的な儀式に積極的に参加することを、できれば控えるようにと勧めたのです。それが彼らにとつて試練になりました。コリントの信徒たちは、「そんなことをしたら、生活や仕事の上で困ってしまう」と戸惑いを覚えざるを得なかったでしょう。

パウロは「異教徒とは一切つき合うな」とは決して言いませんでした。それではこの世で生きていけません。しかし彼は、「あなたがたの信仰においては、きちんと節操を守るように」と勧めたのです。聖餐の盃とパンをいただく私たちは、キリストと交わる者となるはずで、キリストの仲間になることと同時に悪霊の仲間になることはできない、と言ったのです。多神

教的な日本に住むわたしたちにとつても、これは悩ましい問題です。「神は…試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えてくださる」とパウロは言いました。本当でしょうか。もし「試練」が重い病気だとして、私なら、病状の快復、周囲の励まし、自分の心の強くなること、などを「逃れる道」として期待します。そのように、たとえコリントの信徒たちが、偶像の宮の件で試練となる決断をしたとしても、「何とかなる」とパウロは言ったのでしょうか。

しかし、そういうこと以上に、パウロはもつと確かな「試練を逃れる道」を知っていたのだと思います。それは、キリストのもとに私たちが皆で逃れることができると、ということ。一緒にキリストの血にあずかること、キリストの体にあずかること(16〜17節)。キリストという、最も確かな「逃れる道」が、わたしたちには備えられています。「神は我らの逃れ場、我らの力」(詩編46編2節)。キリストの体とされたわたしたちの、神に対して忠実な善い僕としての歩みを続けたいと思います。

# 2024年に チャレンジしたいこと

新年を迎えました。  
辰年は政治的な変化が多い年だそうです。  
あなたが今年チャレンジしたいことは何ですか？

## ノイズの豊かさ

大友麻子

50歳を越えた頃から、集中力も持続力も衰えてきました。複数の仕事を同時に進めることが苦手になり、名刺の束にも「どこの誰だっけ」というものが増えました。

我ながら老化の早さに驚愕していますが、老化は悪いことばかりではありません。せつかに生きてきた自分が疎かにしていたことがたくさんあると気付かされたのです。その一つが「関係」でした。

内気だった私は人付き合いが苦手な子どもで、大人になっても仕事で出会った方々との関係が続けることに不熱心でした。ところが年齢を重ねたことで、人とのつながりの豊かさを実感することが増えてきました。つながりの中で育まれる時間、それぞれの瞬間のかけがえのなさに、遅まきながらようやく気づいたのでした。

20代の頃、自分の能力を伸ばすことは十分に夢中になっていた時。

仕事先の方から「いろんな人に関心を持って、相手の話をもっとちゃんと聞いたほうがいいよ」とアドバイスされたことがあります。何を言ってるんだらう、と聞き流していたのですが、今は言わんとされていたことがよくわかります。当時の私はきつと鼻持ちならない奴だったことでしょう。

2023年の夏、文化人類学者の小川さやかさんと社会学者の宮台真司さんの対談企画を思いつき、進行させていました。「社会的な正しさ」が追求されて、人とのノイズが敬遠される時代だからこそ、人は「常に間違える」存在であって、時に相手を傷つけたり傷つけられたりするけれど、関わらないよりは関わった方が面白い。その瞬間の積み重ねに人生がある。そんな1冊にしたかったのです。残念ながらまだ完成していません。

誰もがスツキリとは生きられないけれど、だからこそノイズを立てながら関わる関係性は豊かでかけがえがない。2024年は、そんなことをさらに追求してみたいと思っています。

## 今日・この日から

高橋 誠

年初早々、30年超の付き合いのあるスペインの友人と奥さんが、今回初めての訪日となる3人の娘さんを連れて来日し、久しぶりの親交を温めることとなります。

彼が生まれたのは、緑豊かで新鮮な魚介類が楽しめるバスク地方。バスクといえばフランシスコ・ザビエル（現代スペイン語ではハビエル）の生誕地です。このような歴史的・文化的背景から、バスク地方の中心地ビルバオでは、毎日曜日は家族全員で教会に行き、礼拝の余韻の残る午後、おじいちゃん・おばあちゃんと孫たちが和気あいあいと大きなテーブルを囲んで、長めのランチを楽しんでいる光景をよく見ました。

かつて「太陽の沈まぬ国」と言われたスペインを見ると、経済的には決して恵まれているとは言えませんが、毎日を心豊かに、家族や友を大切に、背筋を伸ばして生

きている姿から、豊かだった時代の文化の伝統を感じます。スペイン同様、国際的には、かつての「栄華」が失われつつある我が国でも、素晴らしい文化の伝統が生活の底流にあります。

これらのことを背景に、今年は、先達が長年にわたって培ってきた数々の我が国の伝統、文化を見直し、味わう一年とたく思っています。定年後、全く新しい産学連携の仕事をなんとかこなして約10年、ようやく3年前に、24時間が自分の時間になってまもなく、全世界的なパンデミックスにより、行動が制限されてきました。制限が緩和された今こそ、日本各地に遺された文化の伝承を自分の目でみる旅ができたらと思っています。昨年初めて、家族への長年の感謝の気持ちを込めた遺言書をしたためましたが、今年もまた元気で、改訂版を書き直すことができるように生きたいと思っています。為政者が矜持を持った生き方を心がければ、苦しむ子どもたちが救えるように、他者に対する思いやりの心を忘れることの無い一年としたいものです。

## ある中年女のチャレンジ

高嶋明子

短大を出てから就職先の会社にあるオーケストラで週末プレイヤーとなったのがきっかけで、以降35年間、オーケストラと弦楽合奏団に所属して演奏活動をしてきました。年に少なくとも2回の本番、時にはもつと沢山出ていることもあったので、これまでにおそらく100以上のステージを経験したことになりました。

ここ最近では過去に演奏した曲目をリピートする機会もあります。しかし20年近くも前のものとなるのと、曲は知っているのに、1から譜読みのやり直し。昔はもつとスラスラと弾けたはずだけどなあ。そして理解にも、若い時分に比べて圧倒的に時間がかかるようになっていきます。特に難しいフレーズに出くわすと、そのたった1小節を練習するのに何時間も平気でかかったりする。そしてやっと弾けたと思っても翌日にはまた忘れて

しまい、同じところを再度やり直す。個人練習が不十分なまま合奏練習に重い気持ちで通い、合奏で再度苦手を課題を見つけ、次の合奏までに練習する。1つの演奏会が終了すると、また次なる課題がやってきて、謹読みから始まり4、5ヶ月かけて演奏会の本番。

こういったことをひたすら繰り返して過ごしてきました。だからこそチャレンジしてみたいことが、2023年にはありました。ベルリンフィル来日演奏会の中で、現首席指揮者のキリル・ペトレンコ氏がアマチュア演奏家と共演する枠があり、オーディションでメンバーを募るものでした。6分間ノーカーットの演奏動画を撮り、ベルリンフィルの審査に通ったメンバーが出られるというもの。結果落選しましたが、動画を提出するにあたり、1ヶ月はそのために練習を重ね、何テイクも撮り直し、それでも納得いくものができずともエントリーした経験は、苦くともやって良かったと思えます。2024年にまたチャンスがあれば、リベンジのチャレンジがしたいです。

## 2024年に チャレンジしたいこと

毛利亮子

90歳になって半年、一人暮らしも11ヶ月を過ぎた。火曜日の午前中はデイサービス、夕刻にお掃除の支援をうけ、木曜午前には食料のほとんどを頼っている生協の配達。毎週末には入院中の夫を見舞う。娘夫婦、息子夫婦が交代で付き添ってくれる。夫の衣服は、持ち帰って漂白し、太陽にあてて届ける。洗濯を業者に委託しないのは私の最後の意地かもしれない。

1人で家籠りとなると、付き合いは、活字かテレビになる。本は娘夫婦が届けてくれるのだが、最近、前日読んだ箇所の内容を記憶していないことに気づいて愕然とした。パラパラとめくって、ああ、そうだったという感じである。テレビはニュースとスポーツが良い。ドラマは苦手になった。

記憶と言えば、約束の時刻などはメモが必要。何時だったかなと

迷い、これがボケなのか、と思う。そんな時に「2024年にチャレンジしたいこと」というテーマをいただいてびっくりである。「私ですか？ 来年ですか？」

「毎朝、歩行器を押しながら隣接する公園を一回りして、できればラジオ体操に加わります」なんて実行できない計画は立てられない。多摩に住んで四半世紀余の間、できればいいなと思いつつ実現できなかつたことなのだから。

「どうしよう？」と考えつつ眠りについた夜、「あの部屋の片づけは？」という優しい声が聞こえて目が覚め、「私、やっぱり気に掛かっているのかな？」と思う。夫の書物の置き場になっていく部屋で、周囲は本棚だが、床には書物の詰まった段ボールに空の段ボールが散らばっている、あの部屋である。

そう、私の最後のお仕事かもしれない。きれい好きを自負していた時もあったのに、今やあちらもこちらも手届かずの有様。せめてあの部屋をサッパリさせよう。

という次第で、2024年春、私は大掃除に挑戦する予定です。

## アイとマコト

角田 誠

氷河期世代の5歳のクリスマスチャンである私が、失われた30年を背負いながらも、2024年に挑戦することは、まさに信仰の旅の新たな章を開くことです。第一に、過去の試練や逆境を通じての学びを踏まえ、「主は心の打ち砕かれた者に寄り添い、霊の砕かれた者を救い出す」(詩篇34・19)に導かれながら、自らの信仰を深め、心の癒しを求めることが重要です。同時に、過去の経済的な不確実性や社会の変化から学び、「天の下では、すべてに時機があり、すべての出来事に時がある」(コヘレトの言葉3・1)との教えに従い、神の計画に信頼し、新たな人生の章に向けて歩みを進めます。そして、「私を強めてくださる方のお陰で、私にはすべてが可能です」(フィリピの信徒への手紙4・13)という言葉に励まされ、過去の挫折や困難に立ち向かいな

がらも、神の力に頼り、2024年には新たな可能性を見出します。この挑戦の過程で、信仰と希望に満ちた未来を切り拓くことで、新しい成果が得られることでしょう。

我々夫婦どちらかに、という原稿依頼がきた。誰が書いても良いだろうと考え、アイに書いてもらうことにした。アイには、2024年に5歳になるクリスマスチャンとして執筆してもらったところ、クリスマスチャンの模範のような原稿を一瞬で作成してくれた。しかし、その原稿をそのまま提出するのは気が引けたので、アイに文章を短くしてもらい(これも一瞬)、マコトが加筆している。

聖句を聖書協会共同訳に修正するの時間を要したものの、原稿は7分で完成した。世の中、便利になったものだ。原稿執筆に悩んだ方は、アイにお願いしてみても。もちろん、アイとはAI(ChatGTP)のことであり、我々に新たな家族ができたわけではない。

## 追悼

## 志磨恵美子姉の思い出

故・志磨恵美子姉

経堂北教会の開拓伝道は、多摩川を越えた西側の小田急沿線に新教会を立てようという計画のもと、開拓伝道委員会が設けられました。志磨恵美子長老はじめ、川戸龍夫長老・好子ご夫妻及び中村真道長老・幸子ご夫妻が中核となつて大沢秀夫牧師と共に、相応しい場所探し等を行っていました。

一方、教団神奈川教区では、小田急沿線3ヶ所に存在していたいわゆる教会空白地域に新しく教会を設けたいという強い希望があり、両者の計画と希望が一致した結果、空白地域の一つであった百合ヶ丘駅前賃貸ホール「フローラ」を礼拝所とする百合ヶ丘伝道所がスタートしたのです。伝道所開設を地域の方々にお知らせするために、中村幸子姉手作りのチラシを手分けして、百合ヶ丘駅前に立つて道

往く人々に声を掛けながら、少し気恥しい気持ちを抱きながらでしたが、手配りしたこと等、一人ひとりが自分の出来ることを率先して行ったのも良き思い出です。

新しく伝道所に来られた方が信仰に関わる悩み・問題を抱えて居られると分かった際、志磨・川戸・中村の3長老がその方のお話を親身になってお聞きし、しっかりと受け止めてくださったことで一人の信仰者の問題解決に留まらず、伝道所としても大きく成長出来ることから、教理に根差したしっかりとした信仰を持った長老の存在は教会にとつてどれ程大切であり、必要か分かりました。

百合ヶ丘伝道所開設に際する3長老のお働きが教会として大切なものであったかは、その後着任された高崎毅志牧師による【教理に根差した主日礼拝】の確立へと繋がったことから解ると思います。志磨恵美子姉は控え目で物静かな方でしたが、しっかりとした信仰に根付いたお話や振る舞いは新しく教会に来られた方々の背中を優しく押すような力強い良き影響を与えておられました。(岡田 基)

## すべての営みに時があり：永遠への思いを与えられた

故・島田敬子姉

従妹の島田敬子さんが10月13日に逝去しました。知的障壁を背負い、両親の愛情のもと、大好きな歌を励みに、精一杯生きていましたが、思わぬ母親の交通事故死、敬子さんも全身打撲で長期入院。また、透析をするほど腎臓を患い、精神疾患も併発し、入院を繰り返しました。叔父は将来を考え、自宅を売り払い、介護付き老人ホームに入居しました。

十数年前叔父が突然亡くなり、私が小さい頃から伝えていた信仰の時が満ちたのか、敬子さんは「一人で生きていくために洗礼を受ける」と言い、心配していた従兄姉たちを驚かせました。同じホームに入居なさっていた田辺裕子さんを通じて経堂北教会に通い、受洗しました。

敬子さんにとって教会は何よりの楽しみとなり、生活態度は周囲が感心するほどしっかりしまし

た。ただ腎臓病のため食事の管理が厳しく辛い思いをし、体調も低下して教会に通えなくなりました。コロナ禍で面会もままならなくなつても「寂しいけど神様がいるから」と電話で言っていました。

ホームでは温かい介護のもと、明るい笑顔の敬子さん！とムードメーカーだったようです。しかし10月に体調が悪化し入院。従妹が昏々と眠っている敬子さんの側で、スマホから「アメイジンググレイス」と「アベマリア」を聴かせたところ、突然覚醒し、微かに嬉しそうに手を振りながら合せて歌っている仕草をしたそうです。その明け方、静かに逝つたそうです。敬子さんの愛唱歌が全身を包み、苦しみなく神様は永遠の世界へ連れていってくださったのでしよう。敬子さんの67年の悲しみや喜びの生涯を振り返るにつけて伝道の書3章が心に浮かびます。

敬子さんの安らかで心から幸せそうな顔を見ながら、神様の時を最善とし、永遠への思いを望みつつ与えられている今を神様に委ねて歩んでいきたいと改めて想いを強くしました。(森川めぐみ)

## 説教

## 『キリストの祝福を携えて』

箴言16章9節

ローマの信徒への手紙15章22節〜29節

岸 俊彦

パウロは、これまでの伝道旅行とこれからについて語ります。ギリシャで開拓した教会によって献げられた献金をエルサレム教会に届け、その後ローマ教会を訪ねます。ローマ教会でスペインの情報を得、また支援を受けてスペインに送り出して貰う計画です。しかし、ローマ行きは何度も妨げられました(15・22)。

ローマ行きを妨げたのも主の御心です。御心に従ってパウロは伝道しました。今や大袈裟とも大風呂敷とも言われますが、「エルサレムからイリリコンまで巡って、キリストの福音をあまねく宣べ伝え」(15・19)「今は、もうこの地方に働く場所がなく」になりました(15・23)。パウロのローマ行きが妨げられていたのが御心なら、いよいよローマに出発することも御心です。

主の御心は計り知れません。ローマ教会を知ったのは、クラウディオス帝がユダヤ人をローマから追放したため、コリントにやってきましたプリスカとアクラ夫妻によります(ローマ16・3)。天幕張りをお互い生業としていたため一緒にコリントで仕事をしたことがきっかけでした(使徒18・2,3)。世の混乱と主の摂理です。

ローマ行きの前にエルサレム教会を訪ねるのも御心です。パウロが伝える福音は、エルサレム教会の使徒たちから受け継いだ福音です(1コリント15・3)。「異邦人が彼らの霊のものにあずかつて」いるのです(ローマ15・27)。異邦人はエッサイの根に接ぎ木された枝です。枝は根に支えられています。異邦人教会は「肉のもの」でエルサレム教会を支える義務があります(15・27)。「宝のあるところにもある」(マタイ6・21)のです。献金の背後に異邦人教会の祈りがあります。キリストの体である教会に連なるユダヤ人も異邦人も1つであることを確かにするためにエルサレム教会を訪問するのです。

15章26節に「援助する」とありますが、ギリシャ語のもとともこの意味は「交わり」「分かち合う」ことを意味します。キリスト者として異邦人もユダヤ人も共に主の恵みを分かち合い、キリストの福音を地の果てまで伝え、主の栄光を現すために交わりを広げ、強め、深めるのです。

石ころからでもアブラハムの子たちを起こしてくださいと語る神は、異邦人からアブラハムの子である神の民を起こしてくださいました(マタイ3・9、ガラテヤ3・29)。エルサレム教会がこの現実を受け入れ、異邦人と共に新しい神の民である教会となったことをローマ教会が知ったら、キリストの祝福がどんなにはかりしれないものか、主を賛美し、主に栄光を帰することでしょう。エルサレム教会に、ローマ教会に携えられたキリストの祝福が、今度はパウロを用いて、スペインにもたらされるのです。

しかし、使徒言行録の伝えるところによるなら、パウロはエルサレムで捕らえられ、ローマには囚人として護送されます。言い伝えによるなら、ローマで殉教し、パウロがスペインで伝道することは実現しませんでした。

それにもかかわらず、パウロが考えていた地の果てスペインどころか、想像もできなかった地の果て、この経堂北教会に、キリストの祝福は溢れるほどにもたらされています。

まことに「人間の心は自分の道のことには思いを巡らす／主がその一歩を確かなものとする」(箴言16・9)のです。

## Book

## 「服従」

著・ミシェル・ウエルバック  
(河出文庫)

2022年フランスにイスラム系大統領が誕生し、イスラム政権が成立するという内容の『服従』（2016年出版）は、当時フランス国内に衝撃を与えた。

主人公はパリ第三大学の文学教授で、彼の視点から大統領選の経過、世論や街中の様子が語られる。中道左派・右派ともに票が伸びず、決選投票には極右政党と穏健派イスラム政党が進んだ。各地の投票所でテロも発生するが、極右を嫌う風潮やイスラム党首の巧みな人心掌握、イスラム政権成立後も過激な変化はないだろうとする世論により、イスラム政権が誕生する。一方で現実のフランスは、世俗主義化による厳格な政教分離が採られ、公共の場から宗教色が一掃されている。フランス革命以降、政治や教育からのカトリックの影響排除に始まり、近年は国内で増加するイスラム教徒に向けられている。2010年には公共の場で

顔を覆うイスラム女性特有のヴェールが禁止され、2023年には公立校で全身を覆うヒジャブの着用が禁止された。従わないと外出も登校もままならない。イスラムコミュニティの反発は強く、国連も性別や宗教に基づく差別だとして、フランス政府を非難している。

このような背景から『服従』がもたらした衝撃は想像に難くない。現代社会と宗教の在り方は変容し、欧米でもキリスト教的思想が倫理や文化の根底を成した世は崩れつつある。昨年米国ユタ州の学校図書館では、聖書が一部の暴力的もしくは性的描写を理由に排除された。日本でもカルトと政治を巡る社会問題が表面化した。宗教と社会、私たちの関わりはどうなるのか。もちろん、純粹に欧州イスラム国家誕生物語として読んでも面白い本である。これが現実となる日がないとも限らない。小説では大統領選挙後の社会も描かれる。人々はイスラムの伝統服に身を包み、一夫多妻制が導入され、国立大学教授にはイスラム教徒しか就けない。主人公も熟慮の末、改宗するのである。(原良介)

## 長老のファイル

12月10日、麻布南部坂教会より松谷祐二先生をお招きし、説教をしていただきました。主任担任教師の後任招聘に伴ってのお招きでした。岸牧師は2025年3月をもって辞任されます。長老会では祈りをもって準備を進めています。来年度の一つひとつの行事が全て、岸牧師の最後の行事となります。丁寧に神様のご指示を仰いでまいります。

松谷先生説教の当日は79名の出席、ライブ配信も32名の方々の視聴となりました。いつもより20名ほど多い出席数です。クリスマスといふこともありますが、やはり松谷先生のお話を伺いたいという皆さんの熱い思いも伝わってくる会堂でした。

松谷先生は大学卒業後IT関連企業に8年勤められ、その後東京神学大学を卒業。2010年、麻布南部坂教会に着任されました。静かに、しかし熱く率直に語られる姿が印象的でした。後任招聘の件については教会総会を経ての決

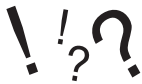
定となります。円滑な交替のために、長老会も協力体制をとってまいります。

さてこの度、聖書協会共同訳聖書による交読詩編が出版されたのに伴って、新しい交読詩編を50冊購入いたしました。クリスマスから活用していきます。教会学校ではクリスマスに「イエス様の12弟子」のパフォーマンス動画を作成しました。クリスマス礼拝後に上映を計画しましたが、皆さんはご覧になられたでしょうか。1日も早く、以前のようにリアルに皆さんとCSの子どもたちとの関わりが持てる日のことを求めて止みません。子どもたちと未来の教会のために神様にお祈りします。

コロナ感染症対策としては、高齢の方々にも配慮し、引き続きマスク着用、手指の消毒を続けていきます。皆様のご協力をお願い申し上げます。

1月14日の成人祝福式は「20歳の祝福式」として何人かの青年にお声がけしています。若い人たちのこれからが神様に守られた豊かな日々となるようにお祈りします。(牧内美和)

## 個人消息



## 牧師の書齋から

クリスマスの季節、お訪ねして聖餐を祝おうと思いましたが。しかし、葬儀が入ったり、ご入院中だったり、思うようになりませんでした。相変わらずビニール越しの15分の面会という施設もありました。ご家族と一緒にしか面会できない施設もあり、双方の都合が合いませんでした。

事情により残念ながら聖餐を祝うことはできませんでしたが。久しぶりのため、正直「双方歳をとった」というのが第一印象でした。マスクをつけていると、お互い「？」となり、教会員と牧師なのか、親戚同士なのか、分からないまま30分ほど四方山話に花が咲きました。目も耳も口もしっかりして、痛いところもなく、医師にもかかっていないとのことでした。お元氣なので安心しました。

息子さんと一緒に訪ねた方は「ほとんど話しません」とのことでした。「諸人ござりて……主は来ませり」と3人で歌い、野宿する羊飼いたちのことを伝える箇所を読み、祈りました。帰り際「ありがとう、ございました」と手を振ってくれました。「今日はよく分かって言葉も出ましたね」と言っ

て息さんが玄関で見送ってくれました。連絡したため、わざわざご家族が教会を訪ねてくださった方もいます。事情を聞くことができましたけれども嬉しいことです。本人と連絡がとれなくとも、そのご家族と電話やメールで様子を聞くことができましただけでも、祈りがより具体的にになります。ご家族が教会員でないからこそ、何らかの繋がりができるよう努めたいものです。

今年もご近所8軒にシクラメンをもってクリスマスの挨拶に行きました。親にまわりついていたり子どもたちが大人!?になって「ありがとうございます」と応対してくれました。20年続けてきた甲斐がありました。何と言うこともない立ち話ができるのも、年月の積み重ねでしょう。

(岸 俊彦)

## 掲示板



## ○西南支区新年礼拝

1月1日(月) 午後2:00 於 霊南坂教会  
説教「真理は自由を得させる」 岸 俊彦牧師  
イザヤ6:9-10、使徒28:17-31

## ○20歳の祝福式 1月14日(日) 礼拝後

## ○世田谷地区一致祈祷会

1月21日(日) 午後2:00 於 宣教教会

## 編集後記



▽昨年は、職場の異動、実家のことと慌ただしかったので、2024年はもう少し落ち着いて過ごしたいものです。(酒井)

「栄 光」2024年1月号

日本基督教団 経堂北教会

〒156-0051 東京都世田谷区宮坂3-21-11

電話：03-3428-5029 / FAX：03-3428-5038

牧師：岸 俊彦

編集：栄光編集委員会

Email：kyodon@nifty.com

HP：http://kyodokita.life.coocan.jp